

弘道

檀信協だより

発行 日蓮宗埼玉県檀信徒協議会
〒349-1101 栗橋町北2-5-12 (吉田卓治方)
TEL (0480) 52-0015

「立正安国・お題目結縁運動」

研修会

1～2面

世界平和祈願祭・大祈祷会

2面

仏教質問箱 『立正安国論』

3面

大聖人・彩の国紀行 宝蔵寺・調神社

4面



真剣に講演を聴講する参加者

埼玉県宗務所主催の「立正安国・お題目結縁運動」研修会が、去る五月一日さいたま市大宮駅前のシヤックビル内東天紅に於いて、檀信徒協議会と寺庭婦人会が協力するかたちで開催され、約四名の方々が集まって研修を受けました。

定刻の午後二時十五分伝道担当事務長三枝泰英上人の司会で研修会は始まりました。関根教沅宗務所長・吉田卓治檀信協会長・相原栄子寺庭婦人会会長のご挨拶をいただき、二時三十分より、前日蓮宗宗務院伝道課長で日暮里修性院御住職の濱島典彦僧正を講師にお迎えし、立正安国「お題目結縁運動」と題して講演をいただきました。

濱島上人は立正大学熊谷学寮の寮監を十七年間務め、現在は西日暮里の修性院御住職として宗門や立正大学でもご活躍をされております。特に修性院は江戸時代から桜の名所で花見寺ともよばれていることより、お寺の塀を桜色に塗ったり、寺にあ



挨拶する関根宗務所長

この研修会は、平成十九年度より実動開始される「立正安国お題目結縁運動」の準備としてこの運動の趣旨・目的などを勉強するために開催されました。

る谷中七福神の布袋尊に光を当ててお寺の活性化を進めている御住職です

講演では、日蓮宗を含めて日本仏教の問題点の所在というところで、数字を上げ出生率一・二九人で進むと二〇六〇年には日本の人口は七〇〇〇万人、政令指定都市の結婚式の六五割がキリスト教式、仲人を立てる比率三割、数字が示していることは宗教意識の希薄化、家意識の欠如、少子化等であり、宗教に対しての意識が急激に変化し、過疎地を中心に三〇四割のお寺は消えてしまうのではないかと話されました。



講演する濱島上人

そのためにも、奏進七五〇年を三年後に控えた『立正安国論』の内面にあるものを考え、『立正安国・お題目結縁運動』を進めていくことが必要であり、その中に答えが見出せるのではないかと示唆されました。

『立正安国論』は、読売新聞の二〇〇〇年伝えたベストセラーで、「日本書紀」に続き第二位に入っております。

また、キリスト教の代表的指導者内村鑑三をして「全世界に於ける彼の如き人物のうちにて最も偉大なる者の一人」として称賛せしめ、敬慕の念をこめ、「国民のバックボーンたる日蓮聖人の信仰と勇気を学ぶべきである」とも言わせたそうです。

また、内村鑑三の弟子、元東大総長矢内原忠雄氏も「日蓮の公の生涯は立正安国論に始まり立正安国論に終わる」と語り、大聖人の心を読みとっています。

このような立派な宗祖を祖師と仰ぎ、七五〇年の歴史と伝統を持つ日蓮宗として、法華経に説かれたお釈迦さまの素晴らしさを伝えた大聖人のお心を体し、法華経による教えに基づき「生命の絶対尊重」を基本理念とし、「立正安国の実現」を眼目とし、信仰運動として定着させるよう僧俗一体となって運動を進めましょう。とお話になりました。

その後の懇親会では、各テーブル毎にそれぞれの立場から、種々の意見や提案が出され、有意義な会話の中にも、実動に向けて意を新たにしました。

世界平和祈願式・大祈禱会開催される

去る二月十七日埼玉県修法師会（加藤貴和会長）主催の恒例世界平和祈願式・大祈禱会が、さいたま市西区法光寺（渡辺行俊住職）を会場に、中山法華経寺の荒行堂で老百日成満の行僧を迎え、修法師会会員各聖出仕のもと開催されました。



水行する成満僧

青年会の唱題行脚の到着を待つて、本堂前に設置された水行場で水行肝文を唱えながらかぶる寒水の水しぶきは、回りを取り囲む檀信徒にも飛び散り、例年になく寒い日が続いた今年の修行僧の熱気が伝わり、合掌する手にも力が入りました。

続いて鬼子母尊神を安置した本堂に法華和讃会の奉詠する歌声が響き、張りつめた緊張が和んだところで、加藤会長導師のもと世界平和祈願祭・大祈禱会がはじまりました。

世界の平和から身の回りの家内安全・身体健全まで、力強く打ち鳴らされる木剣の音と読経の音が堂内に充ち満ちました。



世界平和祈願式・大祈禱会厳修

その後、成満僧が首にかけた撰経を外してお加持が行われ、頭に肩に体にと老百日の荒行の功徳を授かっておりました。参加者は心の安心を土産に満足して帰路につきました。

仙教質問箱

来年度より「立正安国・お題目結縁運動」がはじまるそうですが、立正安国の言葉の由来になる「立正安国論」について教えてください。

お訪ねの「立正安国論」は、日蓮大聖人が文応元年(1260)七月十六日、三十九才の時に鎌倉幕府の前執権最明寺入道(北条)時頼に奏進された勘文で、開目鈔・観心本尊鈔にこの立正安国論を併せて、日蓮大聖人の三大部といわれます。「旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで……」ではじまり、仏法中心の立場に立つ主人と、王法中心の立場に立つ客との問答体で構成されています。

大聖人が鎌倉でお題目の弘通をはじめた頃の正嘉元年(1257)から文応元年(1260)にかけて、鎌倉を中心として東国に大地震・暴風雨・洪水が発生し、その結果飢饉・疫病が蔓延し、鎌倉にも死者や罹災者が街にあふれ、この様子を「牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、すでに大半を超越」と描写しております。

本書は十段から成り、まず第一段で災難の由来について、連続する天変地災は日本国の人々が正法に背き悪法に帰したため、

国を守る善神は国を捨て(善神捨国)、聖人も去った結果、魔や鬼が入り込んで災難を起さることを明らかにします。

立正安国論

旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで……
天変地災飢饉疫病遍滿天下
下屠道地上牛馬斃老弱皆
死路存死之輩既起大半不慮之
旅客一人控問或利詞即
是之又唱而教主之我信其
痛甚除之萌誦東方如來經
我作病即消滅不慮死之詞
立正法華真言妙文我信之難
即滅七福即生之句詞百生百死
之儀有目秘密真言と書置五
瓶之水有人坐坐神入定と儀
澄空觀之月若吉七鬼神と語

中山法華經寺藏 第一紙 立正安国論 国宝

第二段はその証拠として金光明經・大集經・仁王經・葉師經の四經の文をあげ、第三段では現在の日本は仏法隆盛のように見えるけれども、実はその中に

破仏法の謗法者があることを、金光明經・大集經・仁王經・涅槃經を引用し示します。

第四・五段では、客が仏教の正しき理解はこれだとはなかなか断定し難いと反論するのに対して、主人はその謗法者とは浄土宗の法然であると、選択集の文を引いてその謗法を指摘し、先例をあげて災難は法然の念仏に起因すると断定しました。

第六段は上奏(朝廷や幕府にも申すこと)の先例をあげて謗法の禁止を訴え、第七段は災難を祓い除く方法について謗法の禁断を提言します。

第八段は、客が主人の答えに驚き、仏者を禁じ戒めることは仏教本来の趣旨に反するものではないかとの疑念を懐いたのに対し、主人は、謗法を禁断するとは謗法そのものを悪むのであって仏子を禁めるものではない。したがって具体策としては謗者への施(供養)を止めればよろしいと述べ、謗法者への供養を禁じることを進言したのです。

そして、第九段は、葉師經に予言された七難の内、自界叛逆の難と他国侵逼の二つの難が残っており、速やかに謗法を禁止し正法に帰依しなければ、これらの難が起こるであろうと予言

し、「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ」と法華經を信じ、謗法対治をするように促しました。

この六十四字(漢文)の文に本論の表題「立正安国」の意義と、大聖人の宗教の基本的理念が示されているのです。

第十段は主人の訓誡によって仏法の大道を知った客が、自ら謗法の者を根絶して一日も早く平和を招き、自分一人が信ずるだけでなく、他の人々の誤りも正すことに努力致します。と領解(理解して自分の考えを述べること)を述べて終わります。

本書の主張の中心は、正しい仏法が行なわれることによって、この地上に仏国土が顕現されるということにあります。この立正安国の思想は大聖人の教えの中核をなすものであり、生涯を通じて主張されたものであります。大聖人はその生涯において数度にわたり本書を書写し、建治・弘安のころには真言宗破折に関する要文を加えた『広本』が清書され、現在も京都・本圀寺に格護されております。

最後に、本書の客とは最明寺時頼入道、主人を日蓮大聖人と置き変えて本書をお読み頂ければ、更に理解が深まると思います。

藤 寶蔵寺

大聖人彩の国紀行の第三回は、藤市の寶蔵寺です。昔からこの地一帯は法華田と呼ばれ、寶蔵寺の隣には本法院があり、昔から法華信仰が根付いていた地であること想像に難しくありません。寶蔵寺誌を紐解くと、「宗祖が佐渡流罪の砌この地を通り、一信者に妙法と認められた小石を授与、この石を塚におさめ妙法塚と称していた。文和二年(1353)日祐上人がこの石を本尊として一字を建立した」とあります。

また一説には大聖人がこの地で先の墨田五郎時光の男児誕生を伝えられたともいわれていいます。流罪の身にとつて、誕生を喜び合うこともできずに出立した大聖人も安堵の心をなでおろしたことでしよう。

今となつてはその当時を詳しく調べることも難しいことですが、佐渡への旅路、鎌倉街道から和光市、荒川を渡って戸田蔵と旅を続け中山道へを北上する大聖人のお姿に、寶蔵寺を重ねて拝した時、その昔の妙法塚が脳裏に浮かびました。



寶蔵寺本堂を山門ごしに拝す

浦和調神社

つき

中山道を北上すると隣は浦和宿です。この地の深い緑に包まれて今から約一七〇〇年前に創建された延喜式内の古社、調神社(一般にはつきのみや神社と呼ばれています)があります。この境内に「日蓮上人駒つなぎの櫓」の碑が立っておりその裏に



駒つなぎの碑

は木の根に覆われて下部は読みとれません。「日蓮上人此の地を通過されし砌神拝のため以て……を繋ぎたり古老堅ノ信に篤く……亡を惜しみ記して以て傳ふ……」と書かれ、その右横には櫓の巨大な切り株がありました。



駒つなぎの櫓

神社でお話を伺いますと、大聖人はこの地でも難産にて苦しむ妻女のため、神社の境内未申の界に生え茂る櫓に駒を繋ぎ其の木に「曼茶羅を掛け」安産の祈禱をしたところ、安々と男子が生まれたといひます。そのためこの櫓を神木として注連縄を張り安産の守護神として信仰されていきましたが、今は枯れてしまい、大きな切り株だけが残っています。

ご自身が、生きては帰れないといわれる佐渡へ向かう途中、難産で苦しむ妻女のため安産の

祈禱をされた日蓮大聖人の心の大きさに感銘を受け、調神社をあとにしました。



調神社 社殿

編集後記

「立正安国・お題目結縁運動」も来年度より始動します。檀信徒協議会もこの宗門運動に微力ながらも協力してまいりたいと思います。

皆さまのお力添えもよろしくお願ひ申し上げます。

「弘道」では、皆様からの投稿をお待ちしております。

皆様の信仰にまつわるお話をお聞かせ下されば幸いです。お便りお寄せ下さい。